

志望校検討会は「学校力」が試される場

栃木県立石橋高校校長 塩野谷英彦

志望校検討会は単に生徒の志望のマッチングを図るものではない。生徒の志望を育てて可能性を広げる場であり、教師にとつての学びの機会でもある。栃木県立石橋高校の塩野谷英彦校長に、進学校での豊富な指導経験を基に、志望校検討会の意義、検討会を有効に機能させるためのポイントを聞いた。

生徒をどれだけ多面的に捉えられているか

志望校検討会は「学校力が問われる場」だと、私は考えています。検討会で何よりも大切なのは、生徒が将来に何を望んでいるかを把握し、その実現にはどのような進路指導が適切なのかを見極めること、そして志望実現に必要な力が生徒に備わっているかどうかを、伸びしろも含めて判断することです。単に教科の成績に依拠して志望校を振り分けるだけの場であってはなりません。そこで問われるのは、教師が生徒一人ひとりをどれだけ把握している

かです。担任は授業や面談、普段の生活を通してどう生徒と接し、学力や志望、気質を把握しているか。進路指導部は模試や実力テストなどのデータを基に、的確に生徒の合格可能性を判断できるか。教科担任や部活動顧問は、担任が気付いていない生徒の一面をどれだけ把握しているか。検討会で得た結論は、生徒の可能性を広げ、意欲を引き出すものとなっているか。保護者を安心させられるだけの説得力はあるか。

生徒を多面的に捉え、潜在的な力を引き出し、進路実現に結び付けるという学校の総合力が、検討会で問われるのです。

生徒に高い目標を持たせ進路の幅を広げる

検討会は、生徒と教師双方に意義のあるものでなければなりません。生徒の学力を伸ばし、人間的な成長を促す場であってほしいと思います。A判定やB判定という合否ラインのみで判断するならば、検討会を行う意味はありません。センター試験の結果を受けて現実的に見極めるべき局面はありますが、それ以前の検討会は、生徒に自分の力を見切らせるのではなく、高い目標を持たせ、頑張らせるような志望を提示することが大切です。試練や壁を設ける

ることで、生徒は学力だけでなく、人間的にも大きく成長していくのです。

控えめな生徒の場合、志望が高ければ高いほど自分では口に出しづらいものです。また、自分の適性を把握できておらず、大学の知識が少ないうちにミスマッチを起こすこともあります。そうした場合には、進路指導部や学年団が後ろ盾となり、担任が「もっと高い目標に挑戦してみたらどうだ」などと背中を押すことも必要でしょう。生徒自身が気付いていない志望や適性をつかみ、それに応じて生徒が知らない大学や学部を紹介し、進路の幅を広げることが

大切です。学年団や進路指導部が知恵を出し合い、生徒の進路の可能性を広げていくことも検討会の重要な役割なのです。

担任の指導力と 自信を高める研修の場

学級担任や教科担任にとって、検討会は絶好の研修の場です。

検討会では、さまざまな大学・学部への入試情報が飛び交います。どのような入試方式があるのか、学部・学科によって必要な科目は何か。入試にかかわる基礎的な知識を習得する場として有効です。また、模試や



しおのや・ひでひこ◎教職歴32年、同校に赴任して2年目。栃木県立宇都宮高校、栃木県立黒磯高校校長などを経て、現職。

実力テストの成績などをどのように見るのかについても、学すべき点は多いはず。判定はDだが個別学力試験の力はある、A大の入試傾向はこうなので、この生徒に向いているなど、模試の合否判定だけでは分からない、データの背後にある情報を読み取る力が身に付きます。

教師間の指導力の差を縮めることも検討会の狙いの一つです。保護者は多くの情報を抱えています。一度、学校への信頼がなくなれば、塾や予備校などの情報にばかり耳を傾けるようになるでしょう。クラス担任が若手教師だというだけで不安を抱く保護者も少なくありません。

検討会で出た結論は、担任個人の見解ではなく、学校の総意です。担任は自信を持って生徒や保護者との面談に臨めるようになり、ひいては学校に対する生徒・保護者の信頼にもつながるのです。

検討会は、教科担任にとっても授業力を向上させる良い機会になります。検討会では、生徒の個別学力試験の対応力が教科担任に問われる場

面が多々あります。それに答えるためには、主要大学の入試問題を解き、出題傾向を把握する必要があります。入試問題研究によって作問力を高め、定期試験や校内模試の作問や採点を通して、生徒の学力を把握し、指導改善につなげる。このような日々の研鑽が必要であることを、検討会を通じて自覚していくのです。

教師は生徒の 人生のコーディネーター

検討会を有効に機能させるために意識したいのは、検討会を行事化・儀式化させないことです。毎年行っているからという理由で実施しても、生徒の可能性を広げる場にはなりません。

儀式化させないためには、担任による生徒把握が何よりも重要です。志望校を考える上で問題になるのは成績だけではありません。生徒の性格や悩み、友人関係、通塾状況、家族構成にまで及びます。これらを把握するために重要なのは面談です。机を挟んで話し合うだけでなく、掃

除の時間や廊下ですれ違った時の会話からも生徒の様子は分かります。部活動に熱心な生徒なら、練習の様子を見ることも必要です。

今は個人情報保護の観点から、家族関係などにまで質問を深めない学校も多いようですが、きょうだいがいるのか、保護者はどのような仕事をしているのかといった情報は、生徒の進路観を把握する上で重要な要素です。面談や普段の会話などを通して、可能な範囲で生徒の生活まで把握し、その生徒を知ろうとすることが大切です。

教師は、生徒の人生に積極的に関わっていくべきだと思います。そもそも、教壇に立つて授業をするのと自体、私たちは生徒の人生にかかわっているのだということに自覚する必要があります。

「教師は生徒の人生のコーディネーターである」。そうした意識で生徒に迫っていくことが検討会を活性化させ、ひいては生徒の志望を実現するための「学校力」の向上をもたらしのではないのでしょうか。